The Entomological Society of Japan

石井　悌先生

土　生　昶　申

農業技術研究所昆虫同定分類研究室

1959年11月19日石井　悌先生が心臓衰弱で65才の生涯を閉じられた．高血圧と不眠症の治療のため東京医科大学附属病院に入院中であつたが，なくなられるとは夢にも思つていなかつただけに，知らせを受けてあまり突然なのでぼう然としたのは私だけではなかつた．ここに先生の御冥福をお祈りするとともに，先生の略歴・業績や思い出などをつづらせていただきたい．

Dr. Tei Ishii (1894–1959)

先生は1894年（明治27年）8月6日神奈川県の大根村に生れた．1918年（大正7年）7月東京帝国大学農科大学農学実科を卒業後ただちに同大学の嘱託員（同年11月から雇）として勤務され，1920年6月に植物検査所長崎支所長を拝命，1927年（昭和2年）6月農林省農事試験場技手を命ぜられ，1932年8月農学博士の学位を授与され，1935年9月東京帝国大学農学部実科が東京高等農林学校（1949年以降東京農工大学農学部）として独立した際に教授として迎えられ，この間1949年6月～1952年5月農学部長に就任，1958年3月停年で退官され名誉教授になられた．同年4月社団法人日本植物防疫協会研究所長に就任され，現在に至つた．1936年日本昆虫学会の評議員となり20年あまり本会のために尽され，この間1947～1948年には本会会長，1956～1957年には副会長となられた．また応用動物学会では1946～1956年，日本応用昆虫学会では1939～1956年，日本応用動物昆虫学会では1957年から評議員として努められた．

先生は農科大学実科を御卒業後，佐々木忠治郎博士の助手をされたが，色々な昆虫を飼育中に多数の寄生蜂が羽化してくるのを見られて強い興味を感じられ，これらの寄生蜂の研究を決心されたのが先生の生涯のお仕事の動機であつた．長崎に赴任されてからも熱心に文献や標本の蒐集に努められ，独学で研究を続けられた．当時長崎地方の果樹園ではカイガラムシ類が猛威をふるつていたので，先生はこれらの天敵や駆除法に目を向けられ，

NII-Electronic Library Service

The Entomological Society of Japan

その一つのルビーロウムシの天敵について研究されて，1923年に発表された Observations on the Hymenopterous parasites of *Ceroplastes rubens*, Mask., with descriptions of new genera and species of the subfamily Encyrtinae (Bull. Imp. Plant. Quar. Stat. no. 3, pp. 69～112) が先生の処女論文である（厳密に言うと，病虫害雑誌 7, pp. 686～689(1920) に発表された「独活の二害虫に就て」が，私の知るかぎりでは先生が昆虫に関して書かれた最初のものではないかと思う）．また長崎地方ではミカントゲコナジラミがひどい害を与えていたが，1924年10月イタリーの F. Silvestri 博士が中国に渡られる途中長崎に寄られた際，先生はこのトゲコナジラミの天敵を是非探がしてほしいと博士に依頼されたところ，翌年5月博士はシルベストリ小蜂とテントウムシの一種を広東から持参された．これが伊木力村のミカン園に放飼された結果，いまではミカントゲコナジラミが見られなくなつたことは有名である．ミカントゲコナジラミとその天敵に関しては，桑名伊之吉博士と共著で園芸之研究第22号（1927）および農林省農務局病菌害虫彙報第18号（1928）に発表された．またアメリカで使われていた機械油乳剤をヤノネカイガラムシに応用されて，この害虫の駆除に大きな貢献をされた．

東京西ケ原の農事試験場に移られても小蜂の研究は続けられ，トビコバチ科に関する研究をまとめて The Encyrtinae of Japan (Bull. Imp. Agr. Exp. Stat. 2(4), pp. 79～160 (1928)) および The Encyrtinae of Japan. II Studies on morphology and biology (*l. c.* 3(3), 161～202(1932)) を発表され，学位を得られた．その他この時代に数篇の論文を発表されている．1928年5月稲作害虫の天敵調査のため，ホンコン，ヒリッピン群島，仏領インドシナ，蘭領インド，マレー連邦，海峡植民地および英領インドを廻られ，1929年12月帰国（6月に一たん帰国された），続いて翌1930年7月～1931年3月にシナ，ホンコン，仏領インドシナ，シャム，マレー連邦，海峡植民地およびヒリッピン群島（以上地名は当時のまま）へ出張された．

東京府中の高等農林の教授になられてからもいくつかの論文を発表されているが，戦後は新制大学への切替えや学部長の要職につかれて，研究はあまりなされなかつたようである．わが国の大学や研究所の多くではいわゆる出世されると，雑用に追われて研究からは遠ざけられがちになる現状では，いたしかたのなかつたことであろう．第二次大戦中1943年12月～1945年6月に害虫調査のためシンガポール，ジャワ，スマトラなどを廻られた．

停年で学校をやめられてから東京小金井の植物防疫協会の研究所長に就任されたが，いままでとは違つたお仕事なので大変気をつかつておられたようであつた．学校をやめられる前にミクロネシアの小蜂の分類をハワイの博物館から依頼されていて，標本が悪くて記載しにくいとこぼしながら，暇を見ては調べておられた．今年の春お宅にお伺いした時，ほとんどでき上つた原稿を見せていただいたが，これが先生の遺稿となつてしまつた．

先生の書かれた著書では，害虫防除の実際(1936，養賢堂)，農業昆虫学（1950，養賢堂），原色病害虫図鑑，IV 果樹篇（1958，北隆館）（河村貞之助氏と共著）などがあり，日本昆虫図鑑旧版（1932)，同改訂版（1950，北隆館）の寄生蜂を分担執筆された．先生はまたいわゆる趣味の昆虫についても色々お書きになつておられるが，武蔵野昆虫記（1935，三省堂）や南方昆虫紀行（1942，大和書店）が代表的なものであろう．先生は油絵や水彩画の

NII-Electronic Library Service

The Entomological Society of Japan

趣味を持つておられたので，いくつかの虫のスケッチがこれら2書に取り入れられている．

先生は農事試験場時代は当時の木下周太部長から一番叱られたという語りぐさがあるが，東京農工大学の教授になられてからは学生の間に最も人気のあつた先生といわれている．先生ぶつたり学者ぶつたりすることは大きらいで，酒は飲まれなかつたが酒好きの門下生連中の話に合わせて，適当なY談などを披露しては集つた人をユーモアのふんい気の中に包んで下さつた．

農事試験場時代に建てられた東京杉並区和泉町のお宅には，かね夫人と長女の百合子さんがおられ，次女の万里子さん，三女の陽子さんは良縁を得られてとつがれているが，一番弟子の森本象二郎氏が長女の百合子さんと結婚して石井姓を名のられ，昆虫栄養生理学の第一線で活躍されている．

先生は私と顔を合わせると，日本の昆虫分類学をもつと盛んにしなければいけないと口癖のように申され，また門弟の中での分類学者が寥々たるのを淋しがられておられたが，これも昆虫学が各方面に非常に拡がつた現在では，時代の流れとでも言うのであろうか．

会　　報

NII-Electronic Library Service